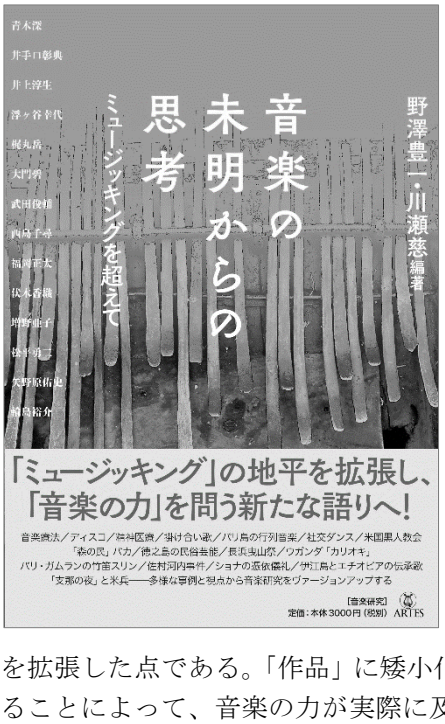
【書評・紹介】

野澤豊一・川瀬慈（編著）
『音楽の未明からの思考－ミュージッキングを超えて』

（東京，アルテスパブリッシング，2021 年，A5 版，312 ページ，3,000 円＋税，第 1 刷）

井 上　淳 生



本書は、「ミュージッキング（musicking）」概念を共通項に、各執筆者がそれぞれのフィールドで出合う音楽体験を考察した論文集である。

ミュージッキングとは、ニュージーランド出身の音楽研究者、クリストファー・スモール（1927～2011）によって提起された概念であり、「どんな立場からであれ音楽的なパフォーマンスに参加すること」（スモール 2011：30-31）を指す。このなかには、演奏することだけでなく、聴くこと、リハーサルや練習をすること、作曲に代表されるようなパフォーマンスのための素材を提供すること、ダンスを踊ること、さらには、チケットのもぎりや、ローディーによる楽器の積み込み・積み下ろし、メンテナンスなど、音楽に関連するあらゆる行為が含まれる。

スモールの議論の重要性は大きく 2 つの側面から指摘できる。1 点目は、上記のように、音楽概念を拡張した点である。「作品」に矮小化されてきた音楽という概念を、あらゆる行為を含めることによって、音楽の力が実際に及んでいる範囲を可視化しようとした点である。

2 点目は、「行為としての音楽」という視点を提起したことにある。音楽を楽譜に基礎付けられた作品とみなす、「モノとしての音楽」という仮定は、実は大きな誤りを含んでいたのではないか。音楽の意味は、作品に内在するのではなく、瞬間ごとに現れては消えていく活動の中でこそ立ち上がるのではないか。こうしたことを言葉を尽くして議論した点にスモールの意義がある。

本書はスモールの議論を引き受けつつ、これまでに提起されてきたいくつかの批判への応答、すなわち、ミュージッキングにおいて意味が構築される具体相を捕捉することと、人間に限定されないミュージッキングのありかたを描くことを意図している。

本書のもとになったのは、国立民族学博物館の共同研究「音楽する身体間の相互作用を捉える－ミュージッキングの学際的研究」である（野澤 2017）。実施期間の 2016 年 10 月から 2020 年 3 月には、のべ 30 を越える研究報告が行われた。

内容は、「序論」と「おわりに」にはさまれる形の 4 部構成となっている。各部はミュージッキングの態様ごとにまとめられ、それぞれに 4 つの章が配されている。出版を担ったアルテスパブリッシング社は、本誌第 15 号で取り上げた『ダンスと音楽－躍動のヨーロッパ音楽文化誌』や、近刊『音と耳から考える－歴史・身体・テクノロジー』を含め、音楽

に関する刺激的な著作を世に送り出している。
　目次構成は以下の通りである。

序論（野澤豊一）
第Ⅰ部　あつまる・かさなる
第 1 章「なぜ人は音楽療法をするのかー福祉現場のフィールドワークから」（西島千尋）、第 2 章「ダンスと振付の間ー日本ディスコ史から考える」（輪島裕介）、第 3 章「音楽することと家を建てることー『生きている』ことの表現として」（浮ヶ谷幸代）、第 4 章「融合と社交ー歌で参与するあり方について」（梶丸岳）

第Ⅱ部　まざる・とけあう
第 5 章「バリ島行列音楽考ー音・身体・場所の経験」（増野亜子）、第 6 章「揺れからダンスへー日本の社交ダンスにおけるカウントとリズム」（井上淳生）、第 7 章「音楽ならざるものによる合体ーアメリカ黒人教会における『喜ばしきノイズ』」（野澤豊一）、第 8 章「プロト・ミュージッキングー『森の民』バカの社会におけるグルーヴの遍在」（矢野原佑史）

第Ⅲ部　つかう・つくる
　第 9 章「行為としての民俗芸能の映像記録とその活用」（福岡正太）、第 10 章「『囃す』というミュージッキングーシャギリが生み出す祭礼の場と関係性」（武田俊輔）、第 11 章「権威をかわして音と戯れるーウガンダのショー・パフォーマンス『カリオキ』のプログラム作成をめぐって」（大門碧）、第 12 章「変わるスリンの指穴ーものと演奏行為の相互作用」（伏木香織）

第Ⅳ部　おもう・かたる
　第 13 章「ミュージッキングはゴーストライトの（悪）夢を見るか？ー佐村河内ゴーストライター事件が示唆するもの」（井手口彰典）、第 14 章「ショナ社会における音楽的才能の霊性ーマシャウィ儀礼の事例から」（松平勇二）、第 15 章「歌の内なる生ー伊江島のくぁーむいうたとエチオピアの蠟と金の事例より」（川瀬慈）、第 16 章「歌が呼び覚まされるときーアメリカにおける『支那の夜』とその記憶」（青木深）
おわりに（川瀬慈）

「序論」では、編者の一人である野澤が、本書の視座を解題したうえで既存の議論に対して本書が持ちうるインパクトを提示している。本書では、音楽演奏やダンス、歌に代表されるような、およそ音楽に含めうるあらゆる行為の総体としてのミュージッキングに注目している。本書の目的が端的に表現されているのが以下である。

　私たちが目指すのは、世界の様々な場所で営まれるミュージッキングを人と人、人とモノ、人と観念の「出会い」の場として把握し、そこからある種の普遍性や比較参照点を取り出し、音楽という概念を解体し、音楽の未明とでも呼びうる地平から思考を試みることである。それは、人びとの営みから「音楽」や「ダンス」をあえて抽出することなく、ミュージッキングの全体性をありのままに捉えることを意味する（p.13-14）。

このように、野澤は従来の音楽概念が取りこぼしてきた、あるいは意図的に退けてきた現象、行為を「音楽の未明」という言葉に託し、いま一度、音楽の力をとらえようと宣言する。

特筆すべきは、世界を「動詞」でとらえようとするティム・インゴルドの議論にミュージッキング概念を重ねることで、人文社会科学においてどちらかというと周辺に置かれてきた音楽研究の中に学問全体をとらえ返すポテンシャルを見出している点である（p.19）。音楽的経験の多様な姿を描くに留まらず、本書の射程を学問全体の刷新にまで広げている点に、編者の矜持と野心が表れている。

第Ⅰ部～第Ⅳ部に収められた全16の論稿はそのタイトルが示すとおり、地域、ジャンルは実に多岐にわたる。少なくともこれだけ多様な現場で、ミュージッキングは観察できるのである。各論稿が分け入るのは、音楽療法におけるセラピストークライエント関係（第1章）、ディスコにおける規範としての振り付け（第2章）、「生」の軌跡を描き出すものとしての「音楽すること」（第3章）、掛け合い歌を通してみた社交と融合（第4章）、音・身体・場所の相互作用としての行列音楽（第 5 章）、身体と音楽をつなぐリズムとカウント（第6章）、「継ぎ目」のない礼拝を支える「ノイズ」（第7章）、日常と非日常に連続するミュージッキング（第8章）、行為の連鎖としての映像記録の作成（第9章）、都市祭礼の背後にある関係性と場（第10章）、「指示」と逸脱に影響する音の存在（第11章）、楽器製作と演奏の間の相互作用（第12章）、今日の日本におけるミュージッキング概念の意義と限界（第13章）、音楽的行為にまつわる才能と霊性（第14章）、歌や語りをめぐるイメージの再創造（第15章）、歌を介した記憶の蘇生と更新（第16章）である。

読者は、音楽の力がおよぶ範囲がかくも広範囲にわたること、言い換えると、音楽の懐の広さを知ることになる。そして、ミュージッキングという窓を通して自身の日常やフィールドを見つめ直すことで、音楽をめぐる多様な論点があぶり出されることに驚くだろう。そう期待せずにはいられない。

「おわりに」で編者の一人である川瀬は、武満徹の「間」を引きながら、コロナ下であっても枯渇しない音楽への希求を、来るべき時代に向けた黎明になぞらえる。そのうえで、本書で展開した議論が人文諸学全体に波及する問題提起となることを期待し、本書を締めくくっている。

巻末の各執筆者紹介欄には、経歴のほかに「私を変えたミュージッキング」という項目が設けられている。ここでは、音楽との向き合い方に関する原体験とも言えるエピソードが紹介されており、執筆陣の「横顔」をうかがい知ることができる。

本書を読み通しながら、評者は次のことを幾度となく思い出していた。それは、札幌市内でピアノ教室を開く女性との対話である。音楽への向き合い方について2人で話していた時、彼女は「音楽が素晴らしい、ってないと思う」と言った。少々面食らった評者は、その言葉をすぐにノートに書き残していた。彼女は、その後に「落ち込んでいた人がある音楽に触れて元気が出たとか、生きる力がわいてきたとか、そういうのが音楽の力なんだと思う」と続けた。もう10年近く前のこの場面を思い返す中で、彼女は実践者として、スモールとは全く異なる経路を通りながらも同じような地点に到達したのではないかと思うようになった。話の中では、音楽大学時代には、「高尚な芸術」として作品化された曲や演奏を音楽と見なす風潮に嫌気がさしていたというエピソードも語ってくれた。そんな彼女が自身の教室で行うのは、参加者の「やってみたいこと」や気分を尊重した、演奏や歌、

ダンスやおしゃべりなどである。

当時は、いわゆる「普通」のピアノの先生とは違うな、くらいにしか思っていなかったが、彼女が目指していたことに名前を付けるとすれば、ミュージッキングが適当なのかもしれない。本書を通してそう考えるようになっている。

評者は舞踊研究の立場から、本誌において舞踊と音楽を同時に扱う研究（舞踊＝音楽研究）のレビューを行ってきた。舞踊は身体動作のみに還元できない現象であるという点を出発点に、「舞踊と呼びうるもの」と「音楽と呼びうるもの」が混然一体となった状況に目を向ける立場である（井上 2018：44-45）。

音楽研究の立場から「音楽と呼びうるもの」の源泉に立ち返ろうとした本書の知見を、舞踊研究にどう活かすことができるのか。評者を含む舞踊研究者に課された課題である。最後に、執筆者の一人として本書の刊行に立ち合えたことに感謝したい。音楽に関心のある一人でも多くの方に、本書のメッセージが届くことを願っている。

引用文献

細川周平（編）
2021『音と耳から考える－歴史・身体・テクノロジー』アルテスパブリッシング、東京.

井上淳生
2018「舞踊と音楽の不可分性－日本の社交ダンスにおける踊り手と演奏家に注目して」『Contact Zone』10: 41-71.

野澤豊一
2017「ミュージッキング研究の挑戦－『音楽』のリアルな姿に迫るために」『民博通信』157: 14-15.

パオラッチ・クレール
2017 西久美子（訳）『ダンスと音楽－躍動のヨーロッパ音楽文化誌』アルテスパブリッシング、東京.

スモール・クリストファー
2011（1998） 野澤豊一・西島千尋（訳）『ミュージッキング－音楽は〈行為〉である』水声社、東京.

（いのうえ・あつき／北海道地域農業研究所）